

留学に向けて

多田野奨学会の皆さま、最近めっきり寒くなりましたがいかがお過ごしでしょうか。私は現在、京都大学大学院文学研究科で倫理学を専攻している西山香帆と申します。昨年度の秋にレポートを提出してから幾分時間が経ってしまっていました。その間にいろいろと取り組み始めたことがあり、どれをご報告しようか迷っておりましたが、今回は他の奨学生の方にもお役に立てることがあるかと思い、留学について取り上げようと思います。実際、すでに海外の長期旅行や留学について本レポートで触れている方もいるようですね。

本題に入る前に今の私の状況を少し補足しておきます。今年の春先に、所属する大学の交換留学制度に申し込み、来年度から半年ほどドイツの大学に留学に行けることになりました。現在私は修士課程で、卒業後は就職予定です。修士 2 年間の卒業スケジュールは変わらず、2 年生の前半で留学予定です。1 年生の間に就職活動と留学準備を進めており、今年の前期にも取り組んでいましたが就職活動後から研究活動に対して本格的に時間を割く計画です。あまり多くないケースかもしれませんが、修士課程でも留学ができるものなのか、実際に準備を進めるにあたって何か皆さんの参考になることがあれば幸いです。

よく留学について耳にするけれど現実感が湧かない、どういう目的でどこにいけばいいのか分からないという方は多いかと思います。私はコロナ禍真っ只中の 2020 年度に現在の大学の学部に入學し、活動が制限されたまま 2 年ほど経過しました。どのような手段を取るにせよ留学には渡航前におおよそ 1 年ほど準備がかかることもあり、3 回生以降は留学に行くことは考えもせず研究や院試勉強に終始していました。しかし、学部の同期や多くの友人が、学部生時代に交換留学や私費留学をしているのを見て、より広い世界に飛び出していく彼等に憧れも確かに感じていました。そして学部卒業後の修士 1 年の春にふと、準備時間の長さを考慮すると留学に行けるのは今が最後のタイミングかもしれないと思い立ち、応募するに至りました。

私の場合、このように身近に留学をした人がいたことが現実感をもって留学を志すきっかけとなりました。もし漠然と留学に興味をもっている方は、まず大学やその他のコミュニティに留学経験者がいればその方からお話を聞いてみたり、行きたい国や大学の目処が立っていればその点を絞って検索を試みたりして、最初に留学の具体的なイメージを持つてみるのが良いと思います。留学でできることや、実際の現地での生活を想像できるよ

うになるまでは、やってみたいという思いもなかなか抱きにくいものだと思いますし、実際に私もそうでした。また、周囲に話を聞ける人がいないという方は、今はSNSや個人ブログなどで留学経験を発信されている方が多くいらっしゃるの、そちらを覗いてみるのも大変良いきっかけになると思います。YouTubeも良いですね。もちろんそのようなメディアにはいわゆる「キラキラ」した側面しか映っていない可能性もありますが、泥臭い努力や困難を乗り越えた先の目標として、とても良いイメージを持てると思います。

次に、留学先や目的、留学の制度などについてごく簡単に触れたいと思います。この点に関しては、この記事を読まれている方の現在の状況によって大きく変わってくると思いますし、インターネット上にはより詳細な情報が数多くあるので、このレポートでは大学間の交換留学制度の紹介のみに留めようと思います。もし海外に行こうと思えば、ざっくりですが留学とそれ以外(ワーキングホリデーや海外旅行の延長という形での長期滞在など)に分かれると思います。そして留学も、①現地の大学の試験を受け正式に入学・在籍する、②私費で留学する、③所属大学の交換留学制度などの制度を使って留学する、という三つが考えられます(他にもあるかもしれませんが、ここでは大きくこの三つだけにしておきます)。この中で、かかる費用や手続きの煩雑さなど多くの観点で優れているのが交換留学制度だと思います。この制度は、世界各国の大学がお互いに協定を結んで、毎期毎年の受け入れ人数の上限を定め、留学希望の学生を提携先に派遣するというシステムです。大学を通して申し込むので自分一人で申請するよりもステップが分かりやすいうえに、授業料も所属大学に通常納める授業料のみで留学ができる場合も多いと思います。もし興味がある方は、大学にそのような制度が無いかな一度見てみると良いと思います。

つい長くなってしまいますね。行きたい大学については、これはもうご自身の目的や割けるリソースによるとしか言えることがないのですが、一例として私の経験を書いておきます。私は修士課程での留学ですが、研究留学というよりもむしろ語学力向上・海外での経験を目的とした学部課程の多くの方の留学に近い目的から大学を決めました。ではなぜ行き先が英語圏ではなくドイツなのかといったところですが、実は一つ落とし穴として英語圏の大学は申請条件としてそもそも英語の運用能力を高いレベルで求められるという可能性があります。私は希望先だった英語圏の大学の基準をクリアするには申請までの時間が足りず、当時の英語運用能力(TOEFLやIELTSなどの英語試験を受ける必要がありました)で申し込みできるなかで、授業参加や日常生活が英語で問題なく行える条件で行先を調べた結果、現在の申請先になりました。国によってその程度はまちまちですが、ヨーロッパ圏には第二言語として英語がかなり普及している地域も多くあります。ドイツもその一つで、もし同じ状況にある方の参考になればと思います。

さて、行き先も決まり、留学期間や申請方法も定まったあとは、何が問題になるのでしょうか。既に察している方もいると思いますが、行政的な手続きは一旦おいておくと大きくは二つ、費用と語学力です。まず費用については、授業料は所属大学に収める授業料で済んだとしても生活費は自身でまかなわねばならない場合が多いと思います。これに関しては申し込める奨学金を探すのも重要だと思います。大学に留学関連の窓口があればそちらへ尋ねてみるのが良いでしょう。それ以外にも、受け入れ先の国の機関が提供する奨学金や(例えば、ドイツには研究目的の留学生向けの奨学金があります)、日本にも自治体や国が提供するものや企業が募集を出しているものなど様々な種類があります。ただし、出願の準備から申請まで何か月もかかるので、早めにチェックするのが良さそうです。

さて、語学力についてですが、これは私も現在なかなか思うように伸びず、悩んでいるところです。奨学生の皆様の中に良い方法や、ご自身の経験談をお持ちの方がいれば、ぜひ伺いしたいところです。一例として、私はこの春に留学に申請してから、英語で開講されている授業への参加、英語が母国語の方(友人や、所属研究室の先生など)と定期的話す機会をもつこと、英会話アプリの利用、英語版でのドラマや小説などのコンテンツ鑑賞等を試してきました。その中で良かったと思うものを二つ紹介します。一つ目は、アルバイトとして英語に触れる機会を設けることです。私は、前期は英語開講の授業のTA(ティーチング・アシスタント、授業準備のようなものです)に、後期は研究室受け入れの留学生のチュートリアル担当に申込みました。アルバイトで英語に触れるメリットは二つあり、一つは勤務なので強制的に英語に向き合う必要があり会話力の向上に積極的になれること、二つ目はお給料をもらっているので自分の英語能力を磨くことに責任感を持つことです。思うに、語学力の向上において一番大変なのはモチベーションの維持です。成長の実感がなかなかもてないものに長期的に向き合うには、それに向き合わざるを得ない環境に身を置くのが一番かと思います。二つ目によかった方法は、英会話アプリです。最近ではAIを相手に会話練習できるものも増えており、私もその一つを使っています。メリットとしては、言い間違えた箇所や苦手なフレーズを取り出してそれだけを何度も練習できること、相手がAIなので失敗しても恥ずかしくないこと等があります。アプリで練習を積んでから、徐々に対人でのコミュニケーションに取り組んでいく。そして逆に、対人の会話でうまく言えなかった表現や詰まってしまった箇所をAI相手に練習する。そんなサイクルができれば、アプリと対人間との会話の双方の特徴を生かして、徐々に実践練習を積めるでしょう。私もこの方法で更に能力を向上させるべく、練習に励みたいと思います。

それでは、大変長くなってしまいましたが、今回はこのあたりで失礼します。留学を検討している方の参考になれば幸いです。それでは皆様、またお目にかかるまでどうかお元気で。